

ロシア語

一 ロシア語の黎明期

わが国とロシアとの関係を語る時、忘れてならないのが、漂流民の役割である。運命の悪戯で、ロシア領のアリュシャン列島やカムチャツカ半島に漂着した日本人の数は夥しい。ロシア側ではピョートル大帝の命により、漂流民保護の政策が十八世紀初頭よりとられ、日本におけるロシア語教育が始まるよりはるか以前に、漂流民による日本語教育がなされていたことは銘記されるべきだろう。

これにたいしわが国で本格的なロシア語の研究がはじまるのは、一八〇四（文化元）年から一八一（文化八）年の間に、ロシア使節によってもたらされたロシア語、満州語の公文書の翻訳が必要になった幕府の命令による。蘭語通詞の馬場左十郎は一八一三（文化十）年江戸に呼び出され、足立左内、村上貞助、上原熊次郎らとともに、箱館に赴き、当時松前藩に幽囚されていたゴロヴニン（一七七六—一八三一、その著「日本幽囚記」は各国語に翻訳され、欧米人の日本認識を大きく変化させた）について、ロシア語の学習をはじめた。

その成果として馬場は『我羅斯語小成』、『魯文法規範』を、足立は『魯西亜辞書』を著している。また仙台藩の藩校養賢堂では蘭学局に魯西亜学和解方を置き、一八七一年までロシア語の授業が行われており、ほかにも幕末から口



市川文吉

シア軍艦が寄港先にしていた長崎の稲佐では、住民の多くがロシア語を解し、海軍士官について本格的にロシア語を学び、志賀浦太郎のように通詞になった人物もいる。この伝統を受けて、幕府直轄の済美館では、一八六五年に英、仏、漢、蘭語、洋算とならんで魯語の教授がはじまっている。

この済美館とは一八六三年開設の英語所（語学所、洋学所と改名）が再改名したもので、この時から英語、蘭語にロシア語が教科目に加えられたのである。この学校は一八六八（明治元）年、長崎府所属となり、広運館と再度改名される。

遣魯留学生と市川文吉

一八六五年に魯語が加えられたことは、この年はじめて幕府派遣の遣魯留学生が送り込まれたことと無縁ではないだろう。慶応元年のこの六名の留学生の筆頭格は、蕃書調所教授職で、日本におけるドイツ学の草分けとされる市川兼恭（斎宮）の長男で、同じく十三歳から蕃書調所でフランス語を学びはじめ、一八六四年には教授手伝並当分助となっていた市川文吉（当時十八歳）である。彼はかのプチャーチン提督（日本から戻った彼は文部大臣に転進していた）の家に寄寓し、文豪ゴンチャロフにロシア語を学び、滯露八年、一八七三（明治六）年岩倉使節団とともに帰国、東京外国語学校魯語科の初代主任教諭となる人物である。

なおこの遣魯留学生の顔ぶれは、開成所の生徒四名、すなわち緒方城次郎（二十一歳）、大築彦五郎（十五歳）、田中次郎（十四歳）、小沢清次郎（十二歳）、それに世話役として、箱館奉行所の山内作左衛門（二十九歳）が同行した。なお最初の遣魯留学生については、山内の縁戚に当たたる内藤遂による先駆的な労作「遣露伝習生始末」（東洋堂、一九四三年）がある。この著作は山内自身の日記や書簡をもとに書かれているので、当時のロシアの状況、それに対する留学生たちの反応も具体的に記されていて、今日では第一級の資料となっている。詳細は省くが、市川文吉を除いて、この留学生派遣は効果をあげなかった。その第一の理由は、留学生在がロシアの後進性に失望したとされている。さらに学生の風紀の乱れを嘆じているくだりは興味深い。「……学校中稽古人みなあしく候間よき事は覚え申間敷、旁々学校之師之傍に栖居候方よろしからんとの事に御座候……」（前掲書、二六一ページ）

折しも露都ペテルブルグでは、皇帝狙撃事件（カラコーゾフ事件）が起こっており、ドストエフスキーの長編「罪と罰」が発表された年（一八六六年）でもあり、世情は騒然としていた。当時英国留学中の薩摩藩士森有礼が夏期休暇を利用して露都を訪れるのもこの年である。山内と意気投合した森は、その著「航魯紀行」に、ロシアの後進性、ロシア語の修得が困難であるにもかかわらず効用が少ないため留學生たちが後悔していることを明記している。森のこうしたロシア認識が、一八八五（明治十八）年の旧外語廃校劇の遠因となっていることは、内藤によっても指摘されてきたところである。

ニコライ露学校の役割

これ以外にロシア語教育という点で注目すべきなのが、宣教師ニコライ（後の大主教）が幕末に箱館の領事館ではじめた露学校であり、これはニコライが東京に移っても続き、一八七三（明治六）年には塾生の数一四〇―一五〇名

にのぼったという。ロシアの《正教宣教協会》に宛てた同年の報告書でニコライはこう書いている。

神学校——これはこの程本来の姿を取るにいたりしました。これまではロシア語と諸学の初歩を教える学校で、人数も多く手間のかかる学校でした。なんらかの目的でロシア語を学びたいと思う者は、皆ここにやって来ました。ロシア語を教える学校が、東京にはほかになかったからです。確かに、一昨年政府はロシア人教師を雇いはしたのですが、肝心の学校の設備が出来ていなかったもので、教師は仕事をしようにもやりようがないという有り様でした。ここにきてやっと他の外国語の学校と並んで、ロシア語の学校も発足しました。今月(三月)の初旬に入学試験がありました。かくして私も、これまで少なからざる時間と労力を取られてきた大量の人々から解放されることになったのです。

外務省所管の独魯清語字所を文部省に移管し、東京外国語学校が発足するのは、一八七三(明治六)年十一月四日だから、時間的にズレがあるが、ここでニコライが「ロシア語の学校」と呼んでいるのが、本学の魯語科であるのは間違いないだろう。ちなみに旧外語が入学試験をはじめて行つたのは、一八七四年三月のことであつた。なお当時の外国人が語科を学校と呼んでいたことは後出のメーチニコフの記述とも一致する。

魯語学科最初の生徒たち

ここで言及されているニコライ塾から旧外語への生徒の移籍については、後に愛媛や新潟県知事、京都市長を歴任する安藤謙介が、『校友会雑誌』(一九一〇年十二月)でこう回想している。

自分は若年の頃より藩の漢学塾に講師兼塾頭を遣つて居つたが、明治五年露語研究の目的でニコライの塾に入った。固より学資不足のために、研究の傍子弟の教育をせねばならぬ次第であつた。処が語学校(大正時代まで本学は外語ではなく語学校と呼びならわされていた——筆者)露語科の教師トラクテンベルグが露語科の生徒が少数であるために、ニコライ塾へ

生徒を別けてくれる様にと、申し込んで来た。そこで此の人の紹介でニコライの生徒四十人程打連れて語学校に入学したが皆貧乏人のこと故其の上級の者には貸費して貰ふことを条件とした。
〔旧語学校回顧談〕

一安藤自身は魯語学下等第二級に配属された。これは一八七四（明治七）年段階では上から二番目のクラスであり、上等第六級には村松愛蔵（自由党きつてのロシア通として知られ、ロシア虚無党の影響を受けたとされる一八八四「明治十七」年の飯田事件の首謀者。出獄後、新聞記者を経て立憲政友会の代議士となり、日糖事件という疑獄事件に巻き込まれたのを機に、救世軍に転じ、生涯を宗教家として生きた）、黒野義文（一八八二年より母校の助教諭となり、二葉亭四迷等を教えるが、外語廃校後、ロシアに渡り、シベリアを徒歩で横断、ペテルブルグ大学日本語科講師となり、コンラッド、エリセーエフ、ネフスキー、スパルヴィン等のすぐれた日本学者を育てた）、代島義俊（開拓使派遣生）の三名が名を連ねるだけであった。

二 旧外語魯語学科の発足と外国人教師

初期外国人教師の横暴さ

こうして旧外語魯語科は始動するが、教員スタッフではかなり苦労することになる。メーチニコフの回想によると、初代のロシア人教師（これは外務省語学所時代の雇い入れ）は、シイドルフといい、洋銀一七〇元の高給に気を良くして、酒びたりになりまともな授業もしなかつたので、ついに生徒と取っ組み合いの喧嘩になり、解雇されたという。彼のことはシイドロフ・ヘオドルロゼレヴィッチの名で外務省資料にその記録が残っている。